

公立高の魅力どうアピールしているか(上)

—福岡県立城南高等学校に聞く—

村田純一・時事通信解説委員・時事総合研究所研究員

少子化が進む中、私立高校の授業料無償化の拡大により、公立高校の危機感が強まっている。公立と私立の学費負担の差が縮まり、受験生の私立人気が高まると予想され、公立高も生徒獲得に向け、アピールに懸命だ。今回、母校の福岡県立城南高等学校(井上英一郎校長〈写真1〉)を訪れ、校長や複数の教諭から現場の声を聞いた。

少子化の影響、必ず出る

城南高校〈写真2〉は1964(昭和39)年に開校した福岡市城南区の住宅街にある進学校だ。「進取 明朗 端正」を校訓に現在までに2万



〈写真1〉福岡県立城南高校の井上校長

4800人以上の卒業生を輩出した。筆者もその一人で、79年卒業の13期生である。2025年度の生徒



〈写真2〉福岡県立城南高校の正面玄関

数1268人(男子651人、女子617人)、全日制普通科のクラス数は計32(1年11、2年10、3年11)ある。ここ数年の生徒数の推移を見ると、今のところ少子化の影響はあまり感じられない。それは福岡市が九州最大の中心都市であり、今なお人口流入が続いているからだ。福岡市の推計人口は約167万人(25年12月現在)。自然動態の人口増減を見ると、死亡者数が出生者数をやや上回っているが、転入者が転出者よりも多く、全体的には微増の傾向が続いている。25年度の城南高の志願者数は定員の1・4倍だったという。

少子化の影響について、井上校長は次のように語った。「今回の高校入試までは、城南高のある福岡地区の『第6学区』で中学3年生の減少はなく、現時点で少子化の影響はありません。ただ、これからは第6学区においても中学3年生の数が2034(令和16)年度までに約1200人減少します。1クラス40人だと30学級ぐらいです。今から8年ぐらいでどんどん減少するので、必ず影響は出てきます」

高校授業料無償化をどう考えるか

では、高校授業料の無償化についての影響はどう考えるか。中学3年生にとっては私立高校の学費負担が減ることで、選択肢が増えていいかもしれないが、県立高にとっては、私立に受験生を奪われることにつながり、マイナス要素が多くなるのではないかと、井上校長は「言いにくいことですが」と言いながらも、「国の教育に対する『お金のかけどころ』はそこではないのではないかと。個人的な意見ですが、お金のかけどころを、もう少し考えていただきたい」と率直に語った。

「今の子どもたちを見ると、関東の私大など、どの大学に行こうが、借金を抱えたままの状態です。奨学金のことです

が、結局は借金です。奨学金対策を充実させた方が、国のリーダーを育てるためにもいいのではないか」

企業や自治体の奨学金返還支援制度はあるが、国としてもっと十分な奨学金返還支援制度が必要ではないかという主張だ。

一方で、「高校卒業後に入社する会社の一般教養試験を見ると、高校教育で十分解ける問題です。98%以上の高校進学率を考えると、それが一般教養レベル。日本経済を支えるポリウムゾーンの生徒を考えると、高校授業料無償化にして選択肢を増やすのは政策的に間違いではないし、両面あると思います。判断がつきにくい状態です」とも語った。

城南高のアピールに取り組む現場の最前線、広報課長を務める和崎竜延教諭は「公立高校の魅力を高めるいい機会だと捉えています」と語る。

「私立高校はこれまで積極的に広報活動をしてきましたが、公立高校は正直に言って、広報活動に弱いところがありました。良い広報活動をするためには、まずは在校生に目を向け、現在の教育活動の改善が必要だと考えます。アピール方法だけでなく、内面の充実が学校の魅力になります。そういう意味では学校の魅力を高める良い機会にもなります」

30年前も私立人気高まる

実は30年ぐらいい前、近隣の私立高校が相次いで、男子校から男女共学にしたり、制服を刷新したり

■2026年（令和8年）2月27日 内外教育 第3種郵便物認可

して、私立高校の人氣が高まった時期があった。城南高でも生徒数、志願者数の減少を招くので、「何とかしなくてはいけない」という危機感から対策を練ったという。井上校長によると、30年前の城南高教諭時代、ちょうど学習指導要領の改訂時期とも重なり、入学してくる生徒の授業に対する臨み方が変化していたという。

「中学校を見学して、どんな授業の仕方をしていいのか調べ、対策を考えました。旧態依然とした講義形式、スクール形式だけでなく、中学校ではよくグループ学習など、いろんなことをしていた。そういう状況を見て、高校でも授業の形式を変えて、もう少し生徒にいろんな活動をさせようと考えました。そこで始まったのが『ドリカムプラン』です」

修学旅行時の「ドリカム活動」

『Dreams come true. 高校生活は将来にわたる自己実現のためにある』という考えの下、平成6年（1994年）に『ドリカムプラン』がスタートしました。――。城南高のパンフレットにある一文である。「未来を切り拓く『ドリカムプラン』と題したページに詳細な説明がある。要は生徒たちが進路を決めるさまざまなプログラム、体験型イベントなどで、そのうちの1つが修学旅行時の「ドリカム活動」だ。

最初は「進路学習」だった。修学旅行時のドリカム活動のスタートは米同時テロの翌年の02年。それまで数年、修学旅行先はオーストラリアだっ

たが、同時テロの影響で海外の修学旅行は断念せざるを得なくなったという。

国内の修学旅行先として、東京で卒業生が勤める企業訪問という形でドリカム活動は始まった。「ドリームズ・カム・トゥルー」というのは「夢の実現」という意味で、名付けたのは当時の学年主任だった和田美千代教諭（現在は既に退職）。ミュージシャンの名前から取ったわけではない。

「他の高校も東京の企業訪問はやっていて思いますが、『ドリカム』という名前を付けたのは城南高だけ（井上校長）のようだ。ドリカム活動の評判を聞いた。

山下主幹教諭「城南高の卒業生が仕事に就いている姿を、この仕事のロールモデルとして見るのようになります。城南高の卒業生だから、生徒の身の入り方が全然違う。具体的に、卒業後にどういう道を歩んだかを伝えてくれる。挫折したことや、今の仕事のこととか、高校2年生の時にこういう経験を聞けるのは、非常に大きい」

和崎教諭「商社に入った卒業生の話は良かった。高校、大学時代の話、石油取引のことを話され、『英語をちゃんとやつとかな、いけんよ』みたいな話もある」

事前の準備は大変で、企業側とは入念な打ち合わせが必要。数人単位、10人以上で訪問することもある。日程はあくまで学校側の都合を優先し、生徒が希望した企業を訪問する。「高校同窓会の東京支部長に相当尽力してもらっている」（井上校長）そうだ。（続く）